



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

奏でる —13歳—



松岡園子

大文字の“G”、筆記体ではどう書くんやったかな。

ゆりは「中1・夏休みの宿題」を片手に、家の1階にある教室のドアを開けた。祖母が入院し奈良へ転院した3月から、誰も出入りする事のなくなった教室。ホワイトボードの上には教室の左端の“A”から右端の“Z”まで続く、手作りのアルファベット表が貼られている。A、B、C、D……。母の夏子がよく歌ってくれた歌声が聞こえてくるような気がした。

祖母が亡くなってから、ゆりの生活は一変した。母の夏子は独り言を話し、何もできなくなった。伯母の亜紀、伯父の良二はゆりを奈良の児童養護施設で住むように手配してくれたが、それには納得ができなかった。身の振り方が定まらず困っていた時に、12年間会うことのなかったお父さんの居場所を知った。お父さんは、亜紀と良二に神戸で暮らせるよう話をしてくれた。亜紀と良二には「もうお世話にならない」という内容の念書を書くように言われたが、そうしてでも神戸に戻りたかった。

奈良の児童養護施設へ入所した4月、無理やり夏子と神戸に帰ってきた5月、そこから2カ月経ち、やっと神戸の中学校に通う手続きをしてもらえた。神戸へ戻った後、お父さんとの連絡は途絶えた。

ゆりは教室を見渡ししながら、夏子が「しっかり者のお母ちゃん」だった頃を思い出していた。

ゆりが幼い頃から夏子は2階で勉強をしているか、1階の教室にいたことが多かった。1階の玄関を歩いていちばん手前の部屋が、英語塾の教室だった。2階の夏子の机には英語の本やカードがたくさん置いてあった。ゆりが保育園に通っていた頃、抱っこしてもらいたくてそばへ行くと、すぐ膝の上に乗せてくれた。そして「once upon a time……」と、おとぎ話をよく聞かせてもらった。夕方に家のチャイムがなると夏子は教室に入ったきり、夜

10 時ごろまで出てこない。毎日、お兄さんやお姉さんが教室に出入りする姿を、一階の奥にある祖父母の部屋から顔を覗かせて見ていた。名簿にある生徒の人数を数えてみると、50 人もいた。ゆりは毎晩、祖父母と過ごしながら夏子が出てくるのを待ち、何度も顔を覗かせた。冬には「だいがくじゅけん」のために帰りが遅くなった「せいとさん」を家まで送りに行くこともあった。住宅街にあるゆりの家の周りは、夜 9 時も過ぎればしんと静まり返る。

「これ、持っておいで」

毎週金曜日の夜 10 時ごろ、祖母がゆりに懐中電灯を渡しながらかつを履く。

「おばあちゃん、待って。今日はこれも持って行く」

ゆりも双眼鏡と星座の表を抱え、急いで靴を履いた。

「ゆりちゃん、星、好きなん？」

祖母と送りに行く「せいとさん」は、お姉さんが多かった。

「うん、お姉ちゃんも“ふゆの だいさんかく”さがそ」

「いいよー。どっちが先に見つけられるか、競争ね」

外に出ると、ぴりっと冷たい空気が頬に当たる。はあっと上を向いて息を吐くと、白く染まった空気が夜空に散った。

ゆりが小学生になると週に 1 回、小学クラスと一緒に入れてもらうようになった。教室には長机が 3 つとパイプ椅子が 7 つ。生徒たちの笑い声が響き、英語のゲームで使う手作りのカードやすごろく、お話で使う棒人形がたくさん用意されていた。ゆりは、爆弾に見立てたボールを生徒同士でパスし合い、英語で受け答えをするゲームが大好きだった。

夏子の机の上には、いつも黄色い英和辞典が置いてあった。数千ページほどもある分厚いページの端が、斜めにめくれあがっている。破れかけた表紙はセロハンテープでつないである。今までに何回も引いたんだろうなと、それを見るたびにゆりは思った。

思い出しながら、ゆりはハッと我に返った。この頃、お母ちゃんは英語で独り言を話している時もある。意味は解らないけど……。意味のわからない言動には息がつまりそうで、いらいらすることもある。夏子のカバンに入っている通帳の残高も気になっていた。暗証番号は通帳の裏表紙に書かれており、キャッシュカードも財布に入っていたからお金を引き出すことはできる。98 万円って、どれ位もつのかな。この家に住むのに家賃はいらなくても、毎日のご飯にお金がかかる。

「おはよー」

「おはよ、はよ行こ。さっき、先輩が先に行っただー」

朝 8 時ごろ、家の前で同級生の奈央ちゃんと晴香ちゃんの声がした。ゆりは、2 階の窓を少し開けて 2 人の後ろ姿を見下ろした。朝早くから鳴いているセミの声が一段と大きくなった。2 人は家の前を通り過ぎていく。今から朝練かな。

夏休みになると夏子と家にいることが多くなるな、と思った。

神戸の中学校に転入してすぐの夏休み前に、同じクラスの子たちが自分の所属するコーラス部や卓球部に誘ってくれた。先生には、部活に必ず入るように言われた。

クラスで吹奏楽部のパーカッションパートを担当している奈々が休み時間にカバンからスネアドラムのスティックを出してきた。

「ゆりちゃん見ててね。力抜いて、右手の人差し指と親指だけで持って」

奈々が右手のスティックの先を机に落とすと、トトトンと震えるような音がした。左手にもスティックを持ち、交互に落とすと震える音が重なり、さらに華やかな音がした。

「うわぁ、かっこいい」

ゆりが同じようにやってみると、トンと1回だけしか音が出ない。

「手に力が入っていると、震えないねん。練習する？ 今日、これ貸してあげる」

スティックを借りて帰ってきたゆりは、夜、寝るまでずっと練習をしていた。

ゆりはリズムを打つことや、楽器を演奏することが好きだった。祖母が入院するまで1年間、エレクトーン教室に通っていた。メロディー、特に和音を奏でることで、どこかに飛んでいけそうなほど気持ちが良くなるのだった。もっと続けてうまく弾けるようになりたい。そう思って気に入った曲のカセットテープを何度も巻き戻しては、家にあるキーボードで同じ音が出せるように練習をした。

ゆりは吹奏楽部に入りたいと思った。

でも吹奏楽部の活動日を聞き、あきらめた。毎日、放課後に練習し、土日も演奏会に出ていくなるととてもできそうにない。家で一人、うつむく夏子の姿が浮かんだ。授業が終わったら早く帰らないと。

1学期の終業式の前日までに担任の小泉先生へ入部届を出すように言われていた。ゆりは放課後、職員室に行き、担任の小泉先生に言った。

「あの、先生、私、部活には入りません」

小泉先生は、ゆりの方に体ごと向き直った。先生の机には、野球部員たちと撮った集合写真と優勝カップが置かれている。

「なんでや、何か1つ入るように言っといたやろ。夏休みの部活動のこともあるから、今日までに入部届を出すようにって。中学生の間に何か打ち込んだものがないと高校入試の時、内申で不利になるで」

急激にボリュームが上がった小泉先生の声に、ゆりは首筋を上っていく熱いものを感じた。

「無理です。家にお母さん一人で……時々しんどくなることがあるから、早く帰らないといけないんです」

ゆりは、「時々」を強調して言った。夏子の様子をありのままに言うと、心配されてまた離れ離れにされるかもしれない。小泉先生の隣や向かいの机にいた先生達も、少し遠くに

いる先生も、こっちを向いているのがわかる。

「見学は行ったんか？ なんにもせえへんってどういうことや。そんな子おらんぞ」

叱られているような、呆れられているような。

「……でも、やっぱり入れません」

「お母さんが時々しんどくなるぐらいで部活に入られへんってどういうことや、活動日が少ない部活もあること知ってるやろ」

小泉先生と話している間に、ゆりは自分が「頑張れない子」のような気がしてきた。怠け者を見るような目で見られているような気がした。

「どうしても入れません！」

そう言い残して、職員室を飛び出した。とんでもない奴だと思われても仕方ない。お母ちゃんを放っておくわけにはいかない。やりたいことはある。でも、今はできない。

廊下に出ると、ゆりがいる南校舎の向かいの北校舎の方から、トランペットの音が聞こえてきた。毎日練習をすると、こんなに上手くなるんだ。自分を表すもののひとつが部活なのかな。校舎を出ると、校庭から掛け声が聞こえてきた。グラウンド整備をしている野球部員、赤いユニフォームに着替えてランニングをする陸上部員。その中には同じクラスの子もいた。みんな光って見える。何かに打ち込めるっていいな、授業以外にも他の世界があるっていいな。私は何にも知らない。ゆりは光が動き回る校庭を背に、校門へ向かうなだらかな下り坂を逃げるように駆け下りた。

校門を通り過ぎようとした時に、体育館につながる階段から声がした。

「あ、ゆーり、一緒に帰ろ」

ハンドボール部の奈央ちゃんだった。

「うん、あれ、部活は？」

「微熱があって、帰ることにした」

奈央ちゃんとは小学校が同じだったが、あまり話したことがない。奈央ちゃんは前髪の根元をケープか何かで固めているのか、ふんわりとしたカールが大人っぽい。

「部活、決めた？」

「うーん、入らへんことにした」

奈央ちゃんは、相手をリードして引っ張っていくような子だ。

「なんで部活入らへんの？」

細い目がじっとこちらを見ている。入るのが当たり前だというような目に見えた。

「お母さんが、調子悪くて……」

同じ説明ばかりするのはしんどいと思った。当たり障りのない話をしながら、互いの家へ向かう分かれ道まで早足で歩を進めた。奈央ちゃんと別れてから、林さんとの会話を思い出した。

林さんはもともとバレー部だったが、6月に華道部に転部したそうさ。

「バレー部、思っていたよりきつかった。だから華道にした。ゆりちゃんは？」

「私、部活には入れない。お母ちゃんのことがあるし。でも、なんの部活にも入ってないって、あかんよね」

林さんはポニーテールを揺らして、ははっと笑った。

「ゆりちゃん帰宅部やん、帰宅部に入ってるやん。私の華道部は週 1 回やし、一緒に帰れる日がいっぱいあるなっ」

帰宅部。そういう言い方もあるのか、と思った。

ゆりは夏休み前の日曜日に、林さんが入っている子ども会に誘われた。近くの公民館で、土日に子供たちが集まっている。子ども会では夏休みも、毎日公民館で宿題をしたり、小学生が鼓笛のピアニカやファイフの練習をするとのことだった。小学生が 20 人、中学生が 7 人、高校生がお世話係で 5 人来ていた。

「何か、楽器してたことある？」

高校生のお姉さんがゆりに訊いた。

「エレクトーンを、1 年だけ」

お姉さんの目がぱっと大きくなった。

「じゃあ、ピアニカのリーダーさんやってもらえるかな、ちょうど女子リーダーが受験前で抜けたとこやねん」

すぐにリーダーとして紹介された。小学生の子たちは、どんぐりのような目を輝かせてこちらを見ている。かわいい、とゆりは思った。

「今度、合宿もあるし、一緒に行こ」

林さんの話を聞いて、楽しそう、行きたいと思った。

ただ、夏子を一人で家に残していくことが気がかりだった。

「あのお母ちゃんも一緒に行ってもいい？」

「うん、いいと思うよ。うちの母さんもお手伝いで行ってるし、訊いてみる」

「でも、なんの手伝いもできんよ。反対に、お世話になるかも」

「いいと思うよ、ハハさんも一緒に行こ」

林さんはそう言って大きくなずき、高く結んだポニーテールを揺らした。

お盆までは、毎日のように夏子を連れて子ども会に行っていた。夏子は子供たちが鼓笛の練習をしている和室で、座って独り言を話し、横になることもあった。お手伝いのお母さんたちは、夏子が居やすいようにそっとしておいてくれているように見えた。

夏子が入院することになったのは、お盆を過ぎたころだった。

祖父の姉だという坂田さんという人が訪ねて来た。ゆりは初めて会う人だった。

「おばあちゃんのお葬式の時には行けなくて。今日は東京から来させてもらったの。奈良の亜紀さんに場所を訊いて来たの。お墓参りだけでもさせてもらおうと思って」

「あ、どうぞ」

足が悪いからとゆっくり歩く坂田さんを奥の部屋へ案内した。

「何回かここに電話をかけたんだけどね、留守みたいだった」

子ども会に行っている日が多かったからかなと思った。祖父の姉ということは、80代だろうか。目元が祖父に似ている気がする。坂田さんは看護の仕事をしていたそうで、夏子を見て「一度、病院で診てもらった方がいい」と言った。近くにお医者さんがあるか電話帳で調べ、駅のそばにあるみたいよと言って夏子と二人で出ていった。

しばらくして息を切らせた坂田さんが戻ってきた。

「え……入院」

一番、恐れていたことだった。

「私がね、お医者さんに付き添った時にそのまま入院になってしまったの。そこで紹介された病院に、1カ月ほどだって。さっき、タクシーで一緒に行って手続きしてきたから。着替えや身のまわりの物を持って行かないといけないんだけど。明日あなた行ける？ 私、今日帰ることになっているから、用意の手伝いぐらいはできるんだけど」

ゆりは、鼻の奥に突き刺さるような痛みを感じた。「今後、お世話にならない」という内容の念書を書くように言った伯父の良二の顔が浮かぶ。

「私はここにいる。おばちゃんお願い。入院のこと、奈良の亜紀おばちゃんと、良二おじちゃんには言わんといて、お願い」

慌ただしくタンスを開け閉めする坂田さんの腕をつかんだ。

「良二おじちゃんって、奈良の亜紀さんのところの？ でもあなた、一人でどうするの？」

「大丈夫。友達もおるし、ご飯とかも自分でできるから心配いらぬから。だから、言わんといて、お願い」

にやりと笑う良二の顔が浮かぶ。坂田さんの腕をつかんだ指に力がこもる。まつ毛の根元まで涙が出かかっているのがわかる。「うん」と言ってくれるまでは、つかんだ手を離したくない。施設に行かせようと思わないでほしい。

坂田さんはしばらく考えていた。

「お友達の家は近く？ おばちゃん、その友達のお母さんに挨拶して帰るわ」

大丈夫……なんだろうか。林さんの家に電話をかけると、林さんのお母さんが出た。

「加奈子ちゃんいますか」

「加奈子ね、今、部活に行っとおわ。どうしたん？」

「あの……お母ちゃんが、入院して」

「え、ゆりちゃん一人？ じゃ、加奈子が帰ったら迎えに行かずわ。晩ご飯、食べにおいで。泊まっていてもいいし」

6時ごろ、林さんが迎えに来てくれた。坂田さんも一緒に坂道を上り、林さんの家へ向かう。林さんの家に着くと、お母さんが「あんた達は、あっちで遊んどいで」と言い、奥の部屋を指さした。奥の部屋から玄関の方へ耳を傾けると、坂田さんが事情を話していた。

しばらくして林さんのお母さんが何回も「いいから、いいから」と言っているのが聞こえた。坂田さんは「お世話になります」と言って帰っていった。

林さんの部屋にはジャニーズのポスターがたくさん貼ってあり、写真集が本棚にあるのを見つけた。嬉しそうに話す林さんの話を聞いている間に、ジュージュウという音とソースの匂いがしてきた。

「加奈子、ゆりちゃん、手伝ってえ」

ふすまを開けると、ホットプレートの上で焼きそばから白い湯気が立っていた。そのうち、林さんのお姉ちゃん、お父さんも帰ってきて一緒に分け合って食べた。お姉ちゃんもお父さんも事情を詳しくは訊かず、一緒にいるゆりを家族と同じように接してくれているようだった。

「ゆりちゃん、今は苦勞してもな、あとで絶対にいいことあるから、お母さん大切にして頑張り。お天道様は見てるって、昔から言うで」

皆が食べ終わった後、お皿を運んできたゆりに林さんのお母さんが言った。

「うん」

夏子の顔が浮かんだ。

「おばちゃんらがおるよ」

ゆりをそっと後ろから抱きしめてくれた。

明るく日ゆりは、電車に乗って10駅向こうの病院を目指した。坂田さんの置いていった入院案内には、面会時間が13時～15時ということや入院に必要なものが書かれている。電車の窓から景色を眺めているうちに、空が次第に黒い雲で覆われてきた。夕立、降るかな。目的の駅に近づくにつれて、田んぼや畑、「山」と呼べるほど多くの緑の木々が右にも左にも広がる景色に変わっていった。駅に着いてもさらに田んぼや畑の続く道を30分ほど歩いてやっと病院に着いた。

病院の面会室は、受付から一旦外に出たところにある、離れのような白い建物だった。外に出た時に病院全体を見ると、4階建ての2階より上は全部の窓に柵があり、今までに見たことのある病院と違ってひっそりとしていた。

面会室でドアの向こうから背の高い夏子が姿を現した。ベージュ色の患者衣を着ている姿は弱々しく見えた。視線は下を向き、歩きにくそうにゆっくりとゆりの前へ来てテーブルをはさんだ椅子に座った。

「おかあちゃん！」

「……ううん、死なない」

「……」

会話にならない。いつも束ねていた長い髪の毛は手入れされていないように乱れ、下ろしたままになっている。ゆりは話さずに、夏子を見続けた。

「もう帰り。時間やから」

職員さんがそう言った。時計を見ると、3時をまわっていた。

「目の前におってもおらんでも、今は、わからないよ。帰り」

ゆりは職員さんに向かって軽く頭を下げた。ゆりはドアの方へ向かいながら、夏子から目を離せなかった。いても、いなくても、わかっていないのだろうけど。見捨てるようで、胸のあたりが突き刺されているように痛かった。ドアが閉まるまで夏子の方を見続けた。ゆりが病院を出ると、頬に雨粒が落ちてきた。

ゆりは、家に帰るとすぐに隣の酒屋さんに行った。

「おっ、ゆりちゃん、らっしゃい。お母さんは元気か？」

真っ黒に日焼けした手には、生魚が握られている。

「あ、おじちゃん。お母ちゃんは昨日、入院した。お婆ちゃんと一緒やわ」

酒屋さんのお婆ちゃんも6月頃から入院したままだ。

「え、そうかあ、ご飯はどうしてるんや？ おじちゃんの店に来てお客さんと一緒に食べて行ってもいいで」

「うん、友達の家で食べさせてもらってる。このアイス、ちょうだい」

「よっしゃ、百万円」

「えっ？」

「はっはっは一、冗談や、今日はおじちゃんのおごりや。それと、これ持って行き」

おじちゃんは、売り物の缶詰やカップラーメンを袋いっぱいに入れて差し出した。

「何か困ったことがあったら、おいでや」

9月1日、2学期が始まった。夏子が入院してからの夏休み中は、子ども会に行ったり林さんの家でご飯を一緒に食べさせてもらった。林さんが泊まりに来てくれたりもした。

学校が始まると、おとなしく過ごすことに徹した。先生達には夏子が入院していることを知られたくない。学校へ行く前に必ずパン屋さんに寄り、お昼に食べるものがないなどということにならないようにも気をつけた。先生達はゆりが1人で暮らしていると、どう思うだろう？ そのまま見守ってくれるとはとても思えない。ゆりは、自分がいた奈良の児童養護施設、あおば園を思い浮かべた。入院は1カ月の予定だから、あと2週間。ゆりが中学校で問題を起こさなければ、親が呼ばれることはないし、家に一人でいても気付かれない。1学期は夏子の調子が悪くて遅刻をしていくこともあった。遅刻や欠席をしないように気をつけないと。あとは、大きな怪我や病気をしなければ、大丈夫。

夏子が9月15日に退院できると坂田さんから連絡があった。坂田さんは保証人になってくれていた。

退院してからの夏子は、静かになったように感じた。寝ていることが増えて、落ち込んでいるような気がした。朝になっても寝ている日が続いた。台所のテーブルには、たくさんの種類の薬袋が置かれている。ゆりがご飯を作り、洗濯をするのは変わらない。でも、

話が通じることが時々あり、ゆりにとってはそれが何より嬉しいことだった。

9月に夏子が退院し、あと1週間で冬休みというところまで来た。通学路にある美容院のガラス窓からはゆりの背丈ほどあるクリスマスツリーが見える。スーパーからはクリスマスソングが聞こえてくる。夏子は1日中寝ていることが多いが、駅前の神経科医院にも通っているようだった。奈良にいた頃よりも、神戸に戻ってきた時よりも、おとなしくなったように感じた。ゆりは、やっと2学期が終わるところまで来られたとほっとしていた。

中学校では、3学期のクラス対抗合唱コンクールの役割決めが行われていた。小泉先生が教室に持ってきたカセットデッキから、課題曲のピアノ伴奏と合唱のメロディーが流れてくる。ピアノの音、好きだな。ゆりは、流れるようなピアノの和音にすっかり引きこまれてしまった。

黒板の上にかけられた時計が、ホームルームも終わりに近づいていることを知らせている。担任の小泉先生はそれを確認すると、みんなに聞こえるように言った。

「ピアノ、まだ決まらんかー」

さっきまでのざわつきが、一気にしんとした。それぞれが、お互いの出方を探り合っているような空気が流れている。きーちゃんは、やらないのかな。たしか、小学校の時からピアノを習っていたはず。ゆりは、隣の班でひそひそと話すきーちゃんの横顔をちらっと見た。丁寧に手入れされているようなつやのある黒髪が、窓から吹きこむ風に揺れている。ゆりは黒板をじっと見据えた。

課題曲 「思い出は空に」 (指揮) 工藤
(ピアノ)

ゆりの家にはキーボードが1台ある。キーボードを奏でている時に感じる、音楽の世界に吸い込まれていくような、ふわあつとした気持ちが心地よかった。だから、好きなメロディーを録音したカセットテープを何度も再生しては巻き戻し、同じ音を出せるように何度も練習をしたこともあった。

「ピアノ習ってる人とか、おらんのかー」

小泉先生の声聞いても、教室の空気が動き出す気配はない。ゆりが知っているだけでもピアノを習っている子が4人はいた。みんな本当に嫌なのかな。

「冬休みに練習する時間あるから、今、自信なくてもいいぞー」

その声でゆりの心に光が走った。誰もいないんやったら、今や。

「おー、吉田、やってくれるか。じゃあ決まりやな」

勢いよく挙げた手をゆっくり下ろした。教室に響きわたる小泉先生の声に頭がくらくらした。クラスみんなの視線にも。でも、本物のピアノに触ることができる。和音を奏でることができる。そう考えただけで、羽衣を着て飛んでいきそうなほど気持ちが高まった。

本物のピアノで感じるふわあつとした気持ちはどんなものなのかな。そう思いながらゆりは、机の上に自分の指で透明な和音を奏でてみた。

家に帰ると、すぐに 2 階へ行きキーボードの電源を入れた。もらってきた課題曲の楽譜を広げてみる。キーボードのスイッチを入れ、音番号「01」を押した。グランドピアノの音に切り替わる。エフェクトボタンを押して、広い会場で弾いている時のように音が響くようにする。楽譜を見ながら、1 小節目の和音を弾いてみる。きれい、美しいなあ。酔うつてこういうことかな。胸のあたりから頭のとっぺんまで、ふわあつと気持ちが良くなる。目を閉じて、しばらく音の響きの世界へ行くことができる。電子音でもこんなに良いんだから、本物のピアノだったらどんなに良い気持ちになれるんだろう。

次の日の放課後、指揮者と伴奏者は楽譜を持って音楽室に行くように言われた。ゆりが音楽室へ入ると、先生の周りに数人が集まっていた。ここに 8 クラスの指揮者と伴奏者、16 人が集まる。その中に、4 組の伴奏者で同じ小学校出身の森さんがいた。訊いてみると、伴奏者はゆり以外、小学校の時からピアノを習っている子ばかりだった。ゆりは、場違いなところへ来てしまったような気がした。ピアノとエレクトーンの違いで気になっていたことがあった。

「なあ、森さん、足元にあるペダルってどういう時に使うん？」

「え、ゆりちゃん、ピアノ弾いたことないん？」

「エレクトーンを一年だけ習ってた。エレクトーンかキーボードしか触ったことないねん」

「そうなん?! あんな、一番右のペダルが、音を響かせるペダル。使うのは右のペダルだけでいいと思うよ」

「え、それ踏まな、どうなるん？」

こそこそと話す二人の会話をさえぎるように、先生が言った。

「じゃあ、見本を見せるから、楽譜を見ながら聞いといて。冬休み明けに、一人ずつ弾いてもらうから」

そう言って先生は、昨日ゆりがキーボードで弾いてみた 1 小節目からの和音を弾き始めた。胸の芯まで沁み込んでくる和音にゆりは目を閉じた。ああ、やっぱり、美しい。本物の音には迫ってくるような勢いがあった。

ゆりは先生のすぐ後ろに立ち、先生の足元と手元を交互に見た。ペダルを踏む時は、何かきまりがあるのかな。よくわからない。先生が右側のペダルを踏むと、確かに音がエフェクトボタンを押したときみたいにのびている。つま先は上下に動き、息をするように小刻みにペダルを踏んでいく。

家に帰るとゆりはまた 2 階に駆け上がり、キーボードの電源を入れた。キーボードにはペダルがない。1 小節目の和音を弾きながら、目に焼き付けてきた先生の足元の動きを真似て、ペダルがあるつもりで畳を小刻みに踏んだ。

弾いて、弾いて、時計を見ると 7 時を過ぎていた。8 小節目までは、つまらずに弾けるようになった。

「お母ちゃん、私、合唱コンクールのピアノ伴奏者になってん」

一階に下りていき、部屋のベッドで横になっている夏子に言った。

「ふうん」

「ふうん」だけでも嬉しかった。

「お母ちゃん、今日は親子どんぶりにしよ」

ゆりは冷蔵庫から鶏肉と玉子を取り出した。玉ねぎを薄く切り、しょうゆ、みりん、酒、だし汁を溶いた玉子に混ぜていく。調味料は、祖母が亡くなる前のまま揃っている。親子どんぶりは祖母と一緒によく作った。

食べ終わるとゆりはまた、2階に駆け上がった。もう一度、1小節目から弾いてみる。途中で詰まったら、もう1回最初から。きれいな和音やなあ。今日、森さんと話していた時に「指番号」の話になった。指番号はエレクトーン教室でも厳しく言われた。どの鍵盤を何番の指で押さえるかが楽譜に書いてある。そう思いながら指使いを確かめると、思うように動かない。弾いていたメロディーも楽譜の指番号を確認するために、途中で止まってしまう。楽しくない。ふわあつとした気持ちにもならない。

……指使いなんて、どうでもいいやん！ 弾けたらいいやん！

ゆりは、何百回と練習をした。今日の音楽室で先生は目線を楽譜に置き、鍵盤を見ずに弾いているように見えた。でも、そんな器用なことではできないと思った。楽譜を目で追いながら弾けるなんて、かっこいい。でもゆりは楽譜に頼らず、見なくても最後まで弾けるように、指に動きを覚えさせた。指使いがめちゃくちゃなのは、わかっていた。でも指使いを完璧にするよりも、途切れずに弾き切る。そうしてふわあつとした気持ちになることの方が大事に思えた。

ゆりは毎日帰ってくると、すぐに2階へ駆け上がった。

ゆりが家に帰ると、台所のテーブルの上にクッキーやチョコレートの箱が20個ほど積み上がっていた。クリスマスのラッピングになっているものもあった。

「え？ これ、どうしたん？」

夏子は笑って言った。

「今日から、『マルタ』のお菓子しか食べないから」

「え、どういうこと？」

「お父さんとお母さんのお菓子だから」

意味がわからない、とゆりは思った。

〽 マルヤマ ヨーシダ マ・ル・タ

その歌を聞いて、夏子が言っていることの意味がわかった。お父さんの名字は「丸山」、夏子の名字は「吉田」だ。丸山の「丸」と、吉田の「田」を合わせると、「丸田＝マルタ」

になる。だから、「お父さんとお母さんのお菓子」になるわけだ。マルタのお菓子はスーパーにも沢山ある。夏子はもう別の世界に行ってしまったように見えた。歌まで作ってしまっている。ゆりは、笑いが込み上げてきてとうとう我慢ができなくなり、ぷーっと吹き出した。夏子はその歌に、手びょうしや振り付けまで加えている。

「くっくっ……お母ちゃん、面白いなあ〜」

夏子の歌う姿を見て、楽しそうだと思った。普段は買わないお菓子をこんなにたくさん買ってくるなんて。マルタのものばかり。ゆりはお腹を押さえて笑った。

言葉に敏感なんだな。同じ人でなくても名前が同じなら、関係があると思いついて避けているような時もあった。夏子が避けている「みちこ」という名前もある。その名前を聞くと話がストップしてしまうことがある。昔、何かあったのかな。ゆりの友達に「みちこ」という名前の子がいるが、その子のお話をするのは避けた方がいいような気がした。

2 学期終業式の前日。ゆりは学校から帰ると、肩に鈍い痛みとひんやりした寒気を感じた。時間が経つにつれて、腕、足にも鈍い痛みが広がっていった。2 階に上がり、タンスから体温計を取り出す。熱を測ってみると、38.2 と表示された。ああ、しんどいはず。

体温計の数字を見てから、座布団にうつ伏せで横になったまま起き上がることができなくなった。手や足に重りがついているように動かない。ゆりは、一階にいる夏子を呼んだ。

「お母ちゃん」

返事はない。

「お母ちゃーん」

いるのはわかる。でも、声が届かない。気づいて……。

さっきまで明るかった窓の外が真っ暗になっていた。時計は 5 時半になっている。ゆりは手すりにしがみつきながら一階に下り、横になっている夏子のところへ行った。

「お母ちゃん、熱が……38 度あるねん」

こういう時だけでも、助けてほしいと思った。

「うん、お水飲んでおき」

前の夏子なら、そんなこと絶対に言わない。

ゆりは、電話の受話器を取った。

「はい、林です」

林さんのお母さんが出てくれたことに、光が差した気がした。

「ゆりです。あの、今、38 度の熱があつて。でも、お母ちゃんが、何もできなくて」

熱い息が、顔全体から噴き出しているように感じる。

「ちょっと待って！ 今から行くから」

電話は勢いよく切れた。

ゆりが 15 分ほどずっとくまっていると、玄関の前に車のライトが明るく光った。林さんのお母さんがゆりを車に乗せ、病院に連れて行ってくれた。病院の帰りに車を運転しながら、

風邪だから明日の終業式には行くことができないねと林さんのお母さんが言った。家でお粥を食べさせてもらい、送ってもらった。3日後に熱は下がった。街がクリスマスや年末年始の賑わいであふれる中、静かな冬休みを夏子とともに過ごした。

3学期が始まった。合唱コンクールの伴奏と指揮を音楽の先生に見てもらう日がきた。放課後の音楽室で1組から順番に音を奏でていく。ゆりは、メロディーの一部分を聞けば、すぐに左右の指の形をつくることができるぐらいまで覚えた。前の4人がなめらかに弾くのを聴きながらゆりは、膝の上で指真似をして待った。ピアノを弾く子の足元が気になって仕方がない。みんなどういう風にペダルを踏んでいるのかな。ピアノに触れるのが初めてだから、どうしても気になる。

ゆりの番になった。黒い椅子に座り、腰を浮かして位置を変えようと椅子の両側に手を添えると、ずしりと重みを感じた。

手が震える。みんなが注目しているのがわかる。指揮者の工藤君と目が合った。最初の和音の形を鍵盤の上でつくる。工藤君が構えた両手を大きく振り上げると、それに合わせて左右の指に力を込めた。鍵盤から押し返してくる力を感じる。重い。ピアノの鍵盤ってこんなに重いものなの。最初の和音と同時に右足にも力を込めた。音がのびた。ペダルからつま先を離すタイミングがわからない。前の和音と次の和音が混じり、汚い和音が広がったように感じた。

指は、最初から最後まで完全に形を覚えていた。最後まで弾き切った。楽譜を見る余裕は1回もなかった。

「どうやった？」

ゆりが廊下に出てきたところで、帰りを待っていた林さんが訊いた。

「はあ～。あかんなあ」

「弾けんかったん？」

「弾くのは弾けたんやけど。ペダルって、1回踏んだら、離すやんか。そのタイミングがわからん」

森さんがゆりの方に駆け寄ってきた。

「ゆりちゃん、ピアノ初めてって言ってたけど、うまかったよ！」

「うーん、鍵盤が重かった。ペダルもよくわからん……」

「ペダルは踏んだままやと音が混じるから、次の音にいく時に、1回ずつ離したりするねん」

「ほおー。すごいなあ、みんな。そんなことできるなんて」

でも、あと少しのところまで来ることができたような気がした。廊下の窓から見上げた空は青く、澄み切っていた。

合唱コンクールの日がきた。たくさん練習はしてきた。ピアノを習っている子が簡単にできることでも、ゆりはその何倍も練習をしないと横に並ぶことができないような気がし

ていた。

本物のピアノに触るのも、2週間ぶりぐらい。

たくさんしてきた練習もこの本番 1 回のためにしてきたのかと思うと、体がこわばってきた。手が震えだす。ゆりは体操をする時のように両手を胸の前で振り、大きく息を飲み込んだ。5組の番がきた。

工藤君の合図で、鍵盤に軽く指を乗せる。音を 1 つでも飛ばすと、楽譜に頼らず弾くゆりは途中からもう立て直せない。指の形の順序と、音で覚えているだけだから。だから、途切れずに弾き切る。練習してきたんだから、大丈夫。

指揮棒が大きく振られる。ゆりもそれに合わせて指に力を込めた。クラスみんなが歌う。高音と低音の声が和音を奏でる。

——合唱は終わった。ゆりは弾き切った。

ペダル使いがうまくいっていないと思うところはあったし、クラスは 2 位以内に入賞できなかったけれど、もう十分、満足だった。

家に帰るとすぐに夏子のところへ行った。

「お母ちゃん、合唱コンクール、終わったよ」

ベッドに腰かけていた夏子はうつむきながら、微笑んだ。

「伴奏、うまくいった？」

え、とゆりは思った。覚えてくれていたんやあ。お母ちゃんが応えてくれた。

「うん、うまくいったよ」

ゆりは夏子の横にしばらく座っていた。窓の外には青空が広がっている。

隣の酒屋さんの前を通りかかると、おじちゃんが配達用のトラックにビールの箱を積み込んでいるところだった。

「おっ、ゆりちゃん、まいど」

おじちゃんは、額に手を添えて敬礼をした。

「あ、おっちゃん、まいど」

ゆりも敬礼をした。

「今日やったかな、合唱コンクール」

「あっ、そうそう」

ゆりは、おじちゃんにピアノは鍵盤が重いとか、ペダルが難しいと話していたことを思い出した。

「その顔は、うまくいったな〜」

「うん、ピアノは成功やった」

ゆりは自分がどんな顔をしているんだろうと思った。

「ピアノのペダルみたいなもんや」

「え、なにが？」

おじちゃんは、トラックの荷台に灯油缶を積み始めた。

「ゆりちゃん言ってたやろ。ペダルを踏んだら、音が響いてきれいな音がする。でも踏みっぱなしではきつくなる。息継ぎするように、踏んだり、休んだりするんやろ」

「うん。それがなにと一緒なん？」

「お母さん」

とんち話みたいやなと、ゆりは思った。

「お母ちゃんも、息継ぎが必要っていうこと？」

「ずっといい状態の人なんておらん。反対に、ずっと悪い状態の人もおらん。よく頑張る人やから、休みも必要や」

おじちゃんは、おばちゃんが入院しているからそう考えるようになったのかなと思った。おばちゃんは去年から入院したままだ。

「じゃあ、おばちゃんも休み期間やね」

「そろそろ帰って来てもらわんと、店は困るけどなあ」

おじちゃんはそう言って、がはははっと笑った。

今は、よく頑張るお母ちゃんの休み期間か。

ゆりは見上げた青空に向けてうーんと背伸びをした。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。